

一、遺跡の位置と環境

奄美大島は奄美群島の主島であり、その大きさは佐渡ヶ島に次ぎ、淡路島より大きい。月平均気温は最低の二月でも14度前後を示し、雨量は極めて多く、亜熱帯性の植物が生育し、植物の極相は椎である。しかし、全島のほとんどが山地であり、北部では南北方向の、中央部以南では東西方向の深い河谷が陸塊を刻み、峻険な地勢と複雑な海岸線を形成している。このため、陸塊の大きさ、気候の温暖と植生の豊かさにかかわらず、北端の笠利半島を除き、先史遺跡の分布は稀薄である。大島中部においてもその数は寥々としており、東シナ海側の礁原に依拠した朝仁その他の数遺跡が目立つ程度のものである。

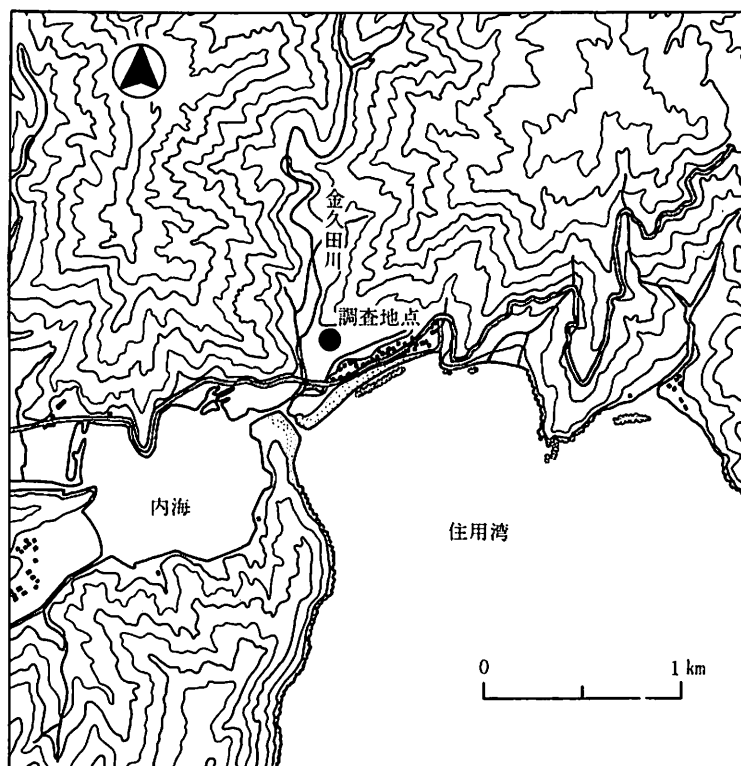
奄美大島の太平洋岸には、その中央部に大きな湾入—住用湾—がある。住用湾は、その奥に更に小さなふたつの湾を抱えている。南の湾入は住用川・役勝川により、北のそれは川内川・金久田川などによって拓かれた谷の沈降によるものである。サモト遺跡は、この金久田川の川口近くの山麓に形成された砂丘性の微高地に占地する。北の朝仁付近の遺跡とも、東の小湊・西の嘉徳とも、峻険な山々に隔てられた地点である。地籍は住用村大字城字池平1135及び1138番地である。(第1図)

金久田川は松長・山ノ神の山塊の水を集めて南流する。海岸近くで急に西へ折れ、川内川の川口湖の観のある内海に注いでいる。この特殊な地形は付近の人文の展開に少なからぬ意義を持つと思われるが、これが遺跡形成当時のままであるかどうかは不明である。ただ、現在の海岸道路より数百メートル上流に渡し場の伝説があること、城(Gusuku)の集落は川と直交方向の海岸砂丘の上に立地しており、これと遺跡との間は東西に長い湿田地帯を形成し、往時はアカゴメの栽培地であったことなどから、城集落の北側は袋状の小規模の内海を形成していたと考えられる。遺跡の占地する微高地は、その汽水性の内海の中に突出していたことになる。この微高地は、水田との比高約1m(標高8.5m)、形状は東西100m・南北10mほどの長三角形を呈している。

以上のことから、サモト遺跡の立地の特色としては、

○峻険な山々に圍繞され、その山々は椎の樹海であったと思われること、





第2図 調査地点付近の地勢

- 汽水性の小さな内海を扼する位置にあること、
 - 陸路による住用湾以外の集落との連絡が極めて困難であること、
 - その反面、付近に和瀬・東仲間・見里、滝ノ鼻山を隔ててはいるが、同じ住用湾中の西仲間・役勝等の類似地形が多いこと、
- などの点が注目され、先史時代の生活集団の存在形態の解明について手がかりを持つ遺跡のひとつでもあると考えられる。(第1図・第2図) (岡本)

二、調査の概要

1. 調査の経過 (第3図)

発掘調査は1983年7月12日より7月20日まで行われた。

まず、遺跡全体に4m方眼のグリッドを組み、東から西へA・B・C…の符号を、南から北へ1・2・3…の番号を付した。

除草とボーリング調査の後、I-6グリッド及びE-3グリッドを試掘した。その結果、I-6グリッドは生活址の一部に当たると判断され、その北側のI-7グリッドに発掘を拡張し、焼土を伴った石組遺構を検出した。また、E-3グリッドの東端に石組が発見されたため、東側のD-3グリッドまで拡張したところ、E-3グリッドからD-3グリッドの北東方向へ、ゆるやかな弧状をなして並ぶ九基の集石遺構と一基の土壌が検出された。

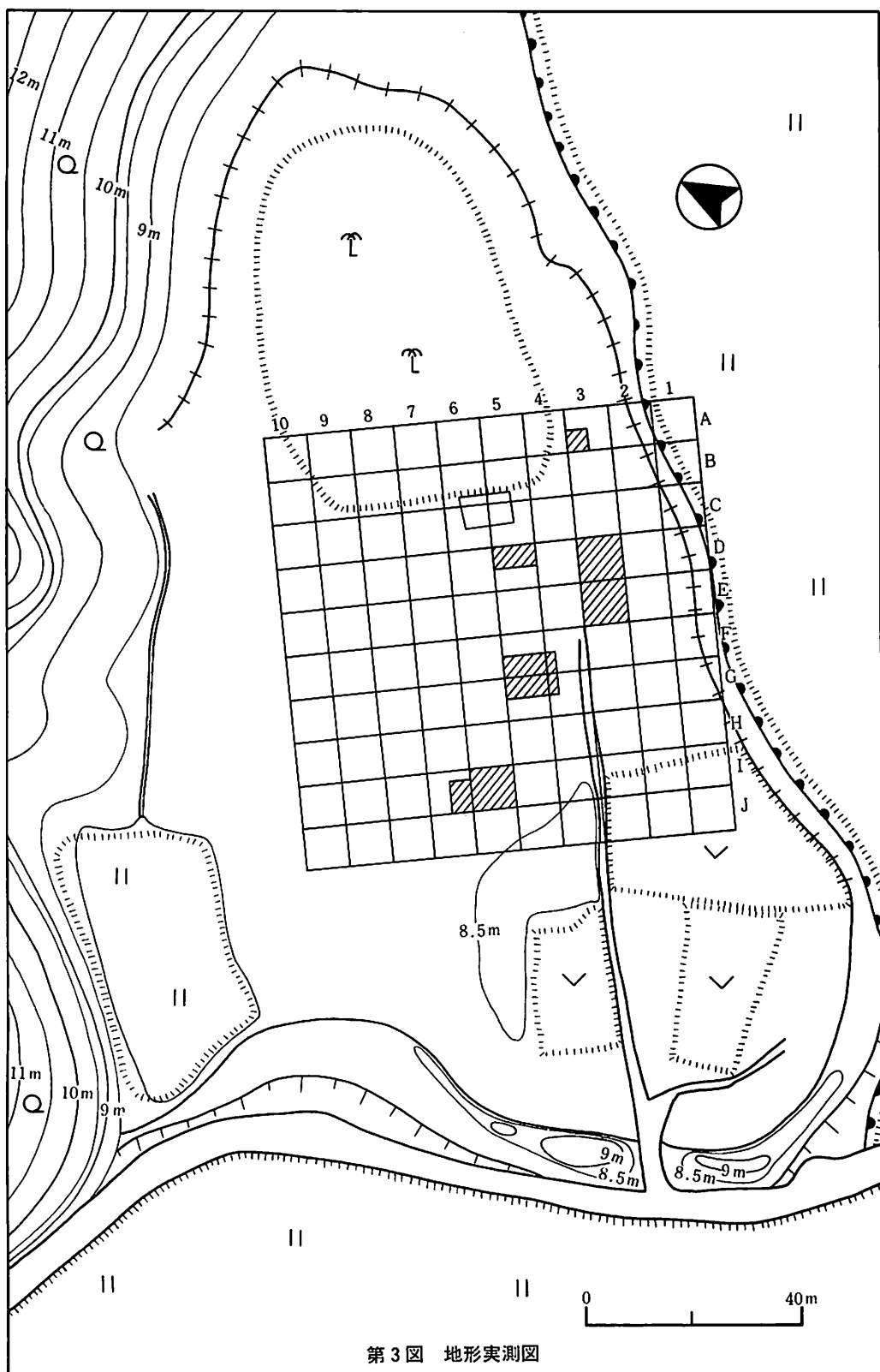
I-6・7グリッドとD-3、E-3グリッドのほぼ中間に位置するG-5グリッドの東側半分を発掘したところ、石組遺構の一部が発見された。そのため、南へ1m、東へ2m、グリッドを拡張した。この拡張部分から、内側に焼土を伴う隅丸長方形を呈する石組遺構が検出された。

ボーリングの結果、D-3、E-3グリッドの集石遺構が弧状に延長するものと予想して発掘したD-5グリッドからは、予想とやや異なり、最下部を礫で均らし、その上に大型の石を並べた方形を呈する石組遺構が検出された。これも内側に焼土が確認されている。

なお、遺跡の東側への広がり調べるために試掘したA-3グリッドからは、少量の遺物が出土したのみで、遺構は検出されなかった。(井上)

2. 層序 (第4図)

A-3、D-5、G-5、I-6・7の各グリッドにおいて、I～Ⅲ層が確認された。層は傾きが少なく、ほぼ水平に堆積している。但し、個々のグリッドにおける層の厚さは均一ではない。



第3図 地形実測図

Ⅰ層 厚さ12～36cmの黒褐色土層で、現在の耕作土(表土)である。

Ⅱ層 やや粒子の粗い黒褐色砂層で、厚さは8～42cmである。出土遺物の量は最も多い。遺構はすべて、Ⅱ層下面からⅢ層に掘り込まれている。なお、D-3、E-3グリッドにおいては、Ⅰ層の下は他と同じ組成の黒褐色砂層であるが、攪乱された形跡があるので、特にⅡ'層とした。

Ⅲ層 粒子の細かい黄褐色砂層である。A-3、D-3、E-3、およびI-6の各グリッドを掘り下げ、無遺物層であることを確認した。(吉武)

3. 遺構 (第5図～10図)

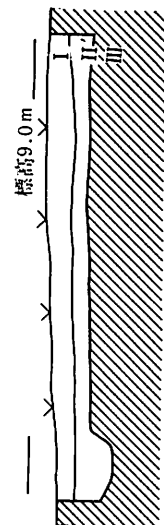
今回の調査では四ヶ所で遺構が確認された。このうち、D-5、G-5グリッドからは石組遺構が、I-6グリッドからは焼土が検出されている。D-3、E-3グリッドでは九基の集石遺構と一基の土塼が発見された。なお、遺構の号数は各グリッドのアルファベットの順によることにした。(第5図)

1号遺構 (第6図)

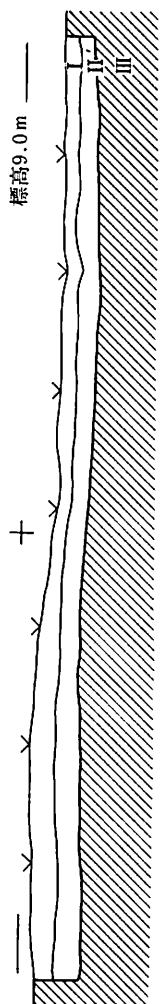
1号遺構は、D-5グリッドの東半部より検出された石組遺構である。一辺2m強の方形の遺構の一部であると思われる。Ⅱ層下面からⅢ層へ深さ5～10cm掘り込まれており、その塼の内壁に沿って高さ約20cm、幅約35～50cmの帯状の石組が面取りを内にして築かれている。

北側の石組はほぼ一直線に築かれているが、南側ではやや配列が乱れ且つまばらになっている。北側石組の方が遺構形成時の状態を保持しているものと思われる。この北側石組で観察すると、まず直径5cm前後の円礫を敷き詰めて簡単な根固めとし、その上に比較的大きな石を積んだ様子がうかがえる。なお、石組に使用されている石はその大小にかかわらず、十分にローリングされた円礫と磨耗のほとんど見られない板状の礫とに二分される。前者は金久田川の転石であり、後者は遺跡の背後の崖の崩落したものであると思われる。

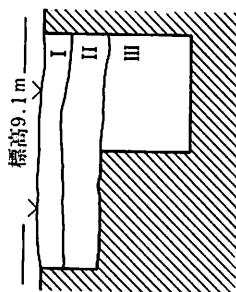
遺構床面は西側へ僅かに傾斜している。西壁に近接し、直径約90cmの焼土が検出された。焼土面は約2cm程くぼんでいる。焼土は赤褐色を呈し、焼けた石、土器片が出土した。



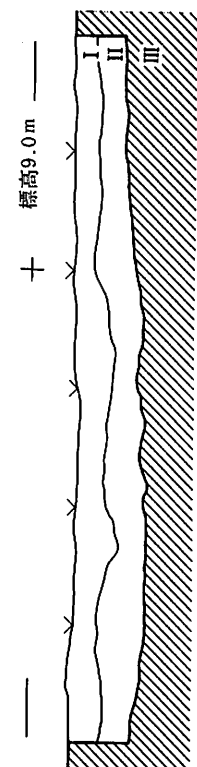
D-3 グリッド 東壁



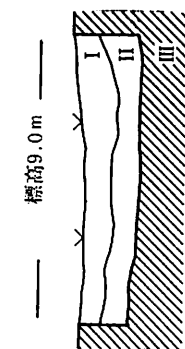
D-3、E-3 グリッド 南壁



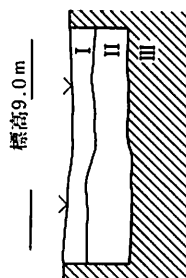
A-3 グリッド 南壁



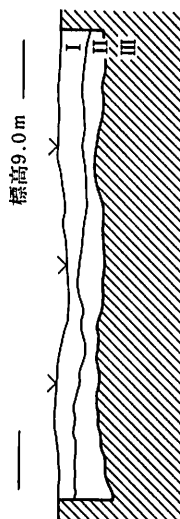
I-6・7 グリッド 南壁



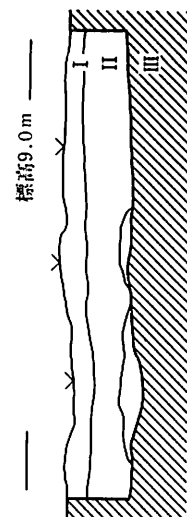
I-7 グリッド 北壁



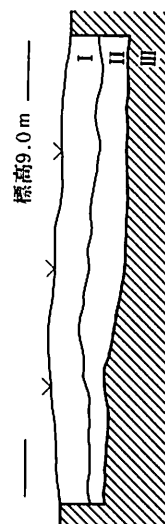
I-7 グリッド 東壁



I-6 グリッド 東壁



I-6 グリッド 北壁

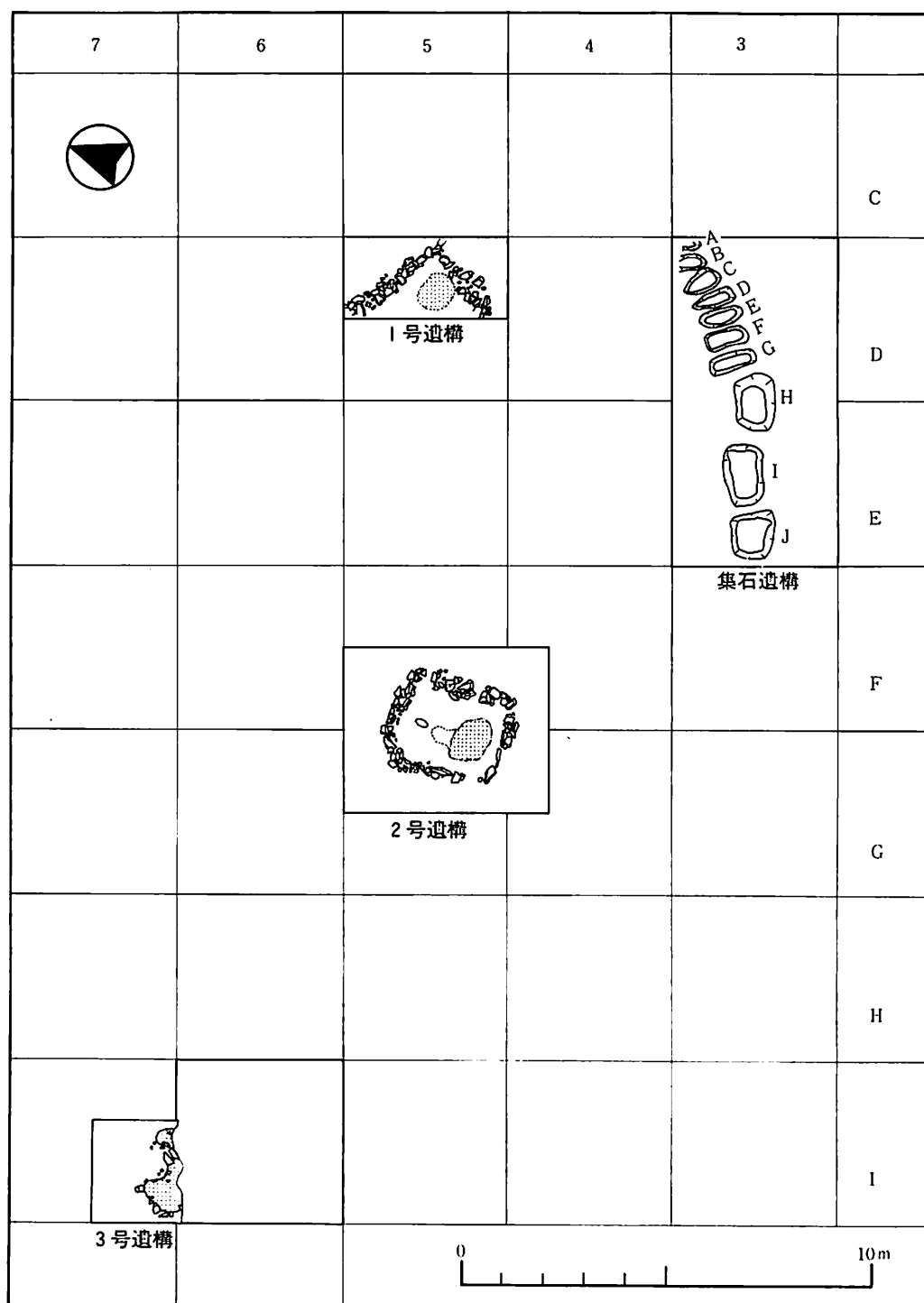


I-6 グリッド 南壁

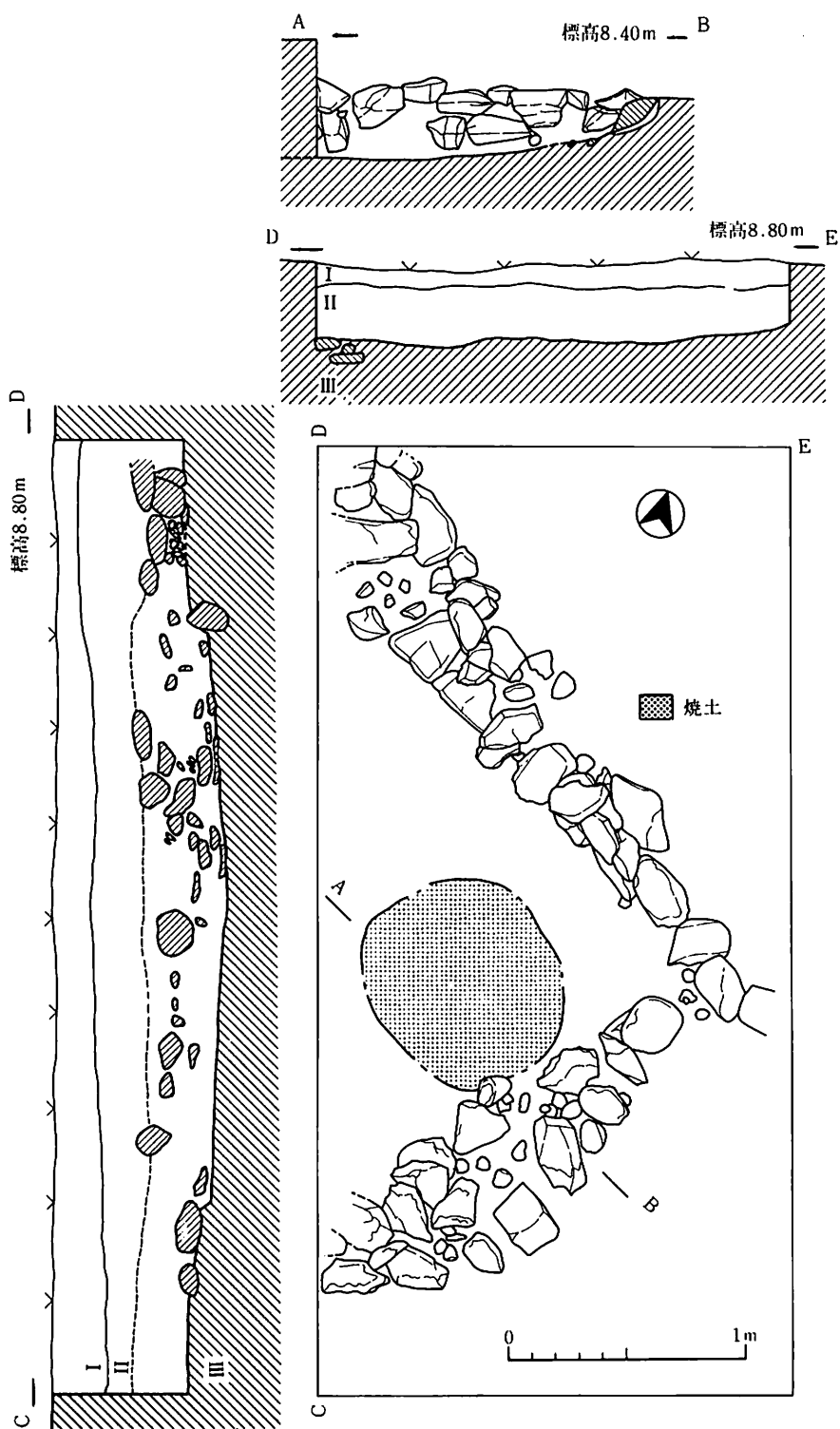


I層:表土
II層:黒褐色砂層
III層:黄褐色砂層

第4図 土層断面図



第5図 遺構配置図



第6图 I号遺構実測図

遺物は石器2点を除く他、全て土器片である。石器は石斧基部の残欠と磨石で、いずれも遺構内に点在していた礫に混在して出土した。

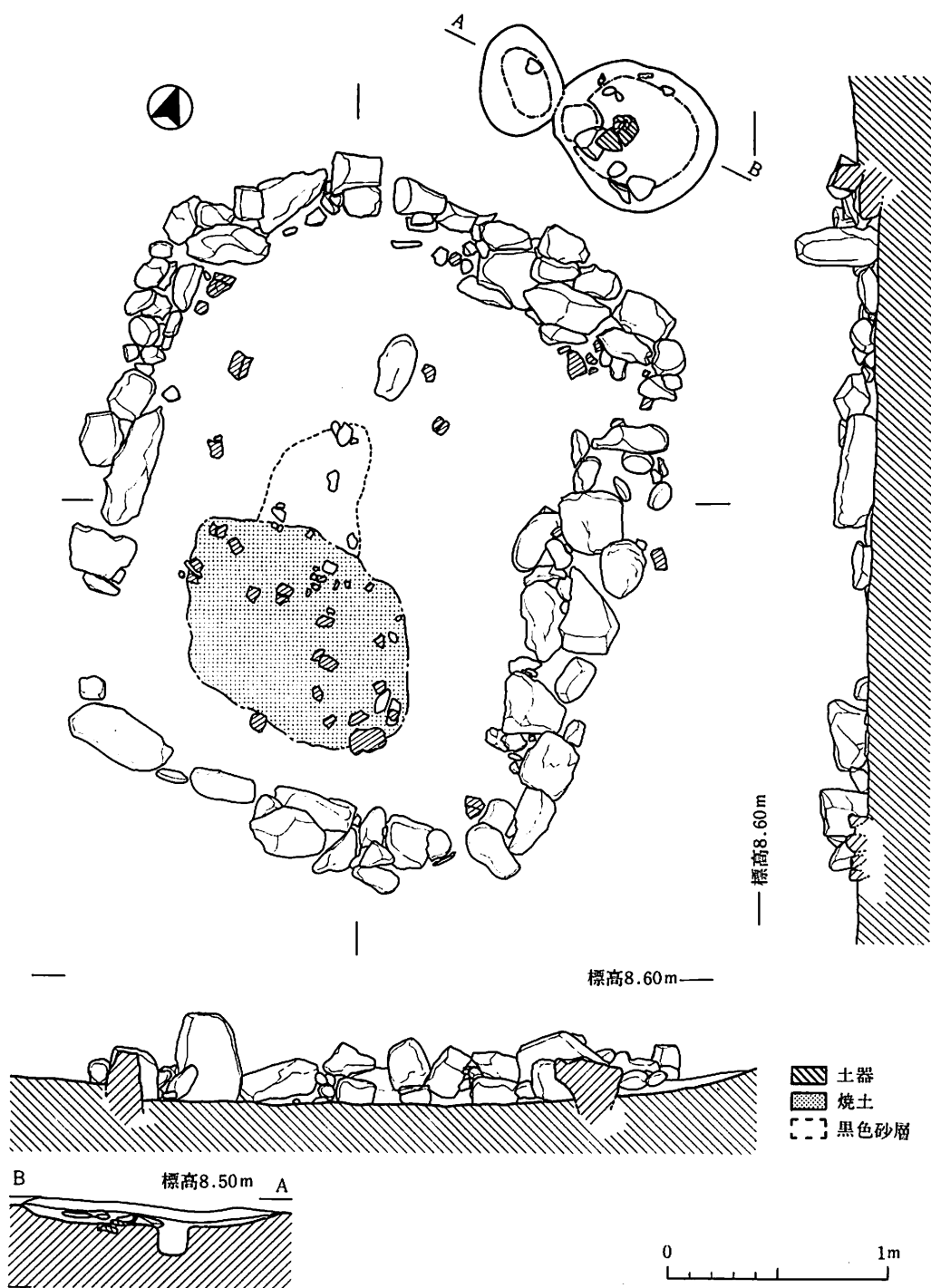
土器片は無文土器（Ⅰ～Ⅲ類土器）が90%以上を占めているが、層序によって出土の仕方に片寄りがある。Ⅱ層では全ての形式の土器が出土しているが、特にⅡ・Ⅲ類土器が多い。Ⅱ層下部は遺構形成後の覆土であると思われるが、ここではⅡ・Ⅲ類土器に加え、Ⅰ類土器の出土量が増加している。遺構床面及び焼土内ではⅡ類土器が大半を占めており、Ⅰ類土器は全く出土していない。第11図の30は焼土近くの遺構床面直上から出土したⅡ類b土器で、33の脚台付の底部片と共に発見されている。同図3は覆土の最上面より出土したⅣ類土器である。（友口）

2号遺構（第7図）

2号遺構は、G-5、F-5グリッドで検出された石組遺構である。長さ約3.4m、幅約2.4m、南北方向の隅丸長方形を呈し、一部はG-4、F-4グリッドに及んでいる。遺構のある部分は他の部分より皿状に低くなっており、構築に当ってⅡ層からⅢ層に浅く掘り込まれたと思われるが、その掘り込みの境は不明である。石組は、高さ約20cm、幅約20～40cmの帯状に石をめぐらしたもので、石の平らな面は遺構の内側に向けられている。現状では、配石はそれほど密ではなく、特に南西の隅では他と比べて粗く、一部に石の欠けた部分がある。北西の角には、高さ40cm程の石が一ヶ所縦向きに据えられている。これだけが他を抜いて聳立し、異様である。石組付近には、流れこみや石組自体の崩壊により、礫が堆積していた。石の大きさは、長さ50cm程のものから拳大のものまであり、人頭大の比較的大きなものがその主体をなす。石はなるべく坐りのよい形状のものを集めた様子が見受けられた。それらには、1号遺構と同様に転石と板状の礫の二様があった。

石組遺構内南寄りに、石組よりわずかに離れて、赤褐色の焼土が検出された。焼土は一辺1m程の不整な方形を呈し、床面から更に15cm程落ち込んでいる。焼土の北端から長さ50cm、厚さ10cm前後の黒色砂層が舌状に伸びている。灰のかき出し口と考えられる。この二部分の面積を合わせると遺構内部の三分の一に及ぶ点が注目される。

遺物は土器片がほとんどである。遺構内だけでなく、石組の間やその周辺からも多くの土器が出土した。特に遺構外の北西1mのあたりから一群の土器片が検出された。



第7図 2号遺構実測図

後述するⅠ～Ⅵ類の土器がⅣ類を除いて各層より出土しているが、Ⅱ層ではⅠ類及びⅡ類a土器がやや多くなり、遺構床面付近に近づくにつれてⅡ類b土器が多くなる傾向が認められる。特に大きな破片は床面に密着して発見され、Ⅵ類cに分類した好資料(第12図70)も床面で発見された。底部は主に遺構内より検出された。但し、床面直上や焼土からの出土例はなかった。

石器は石斧4点、磨石、敲石6点が発見された。出土部位は各層にわたるが、石組付近で礫に混って出土する傾向が見受けられた。

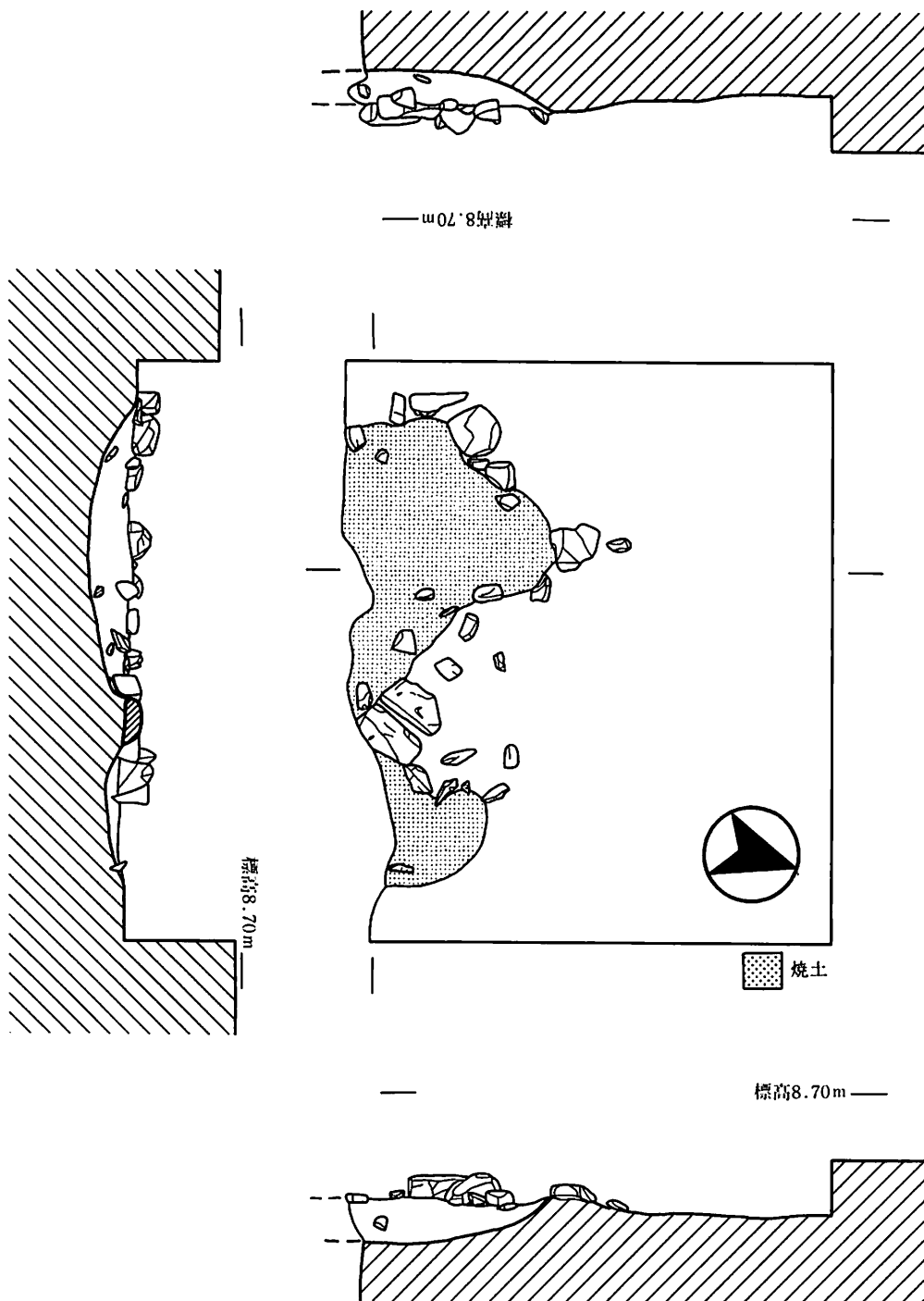
石組遺構の北側に焼土が検出された。これはⅡ層からⅢ層にかけての掘り込みである。落ち込みを持つ直径75cmの焼土と、直径40cmの焼土が接しているような形状を呈している。しかし、周辺より遺物が出土したことにより、この焼土はさらに西に広がると思われる。ここから(第13図71～75・78)の土器が出土している。72の底部は、上部は検出されなかったが、底部が坐った形で検出され、内部に石が一つ据えてあった。73の壺は、綾杉文を持つ喜念系のもので、非常に焼成が良い。一部は遺構の北東の隅から出土した。いわゆる喜念式のものが主に出土している。さらに、磨製片刃石斧(第18図13)が、西の拡張区より出土している。

(藤崎)

3号遺構 (第8図)

Ⅰ-6・7グリッドで、両グリッドにまたがる遺構が検出された。遺構はⅡ層からⅢ層に掘り込まれている。はじめⅠ-6グリッドでその一部が検出されたが攪乱がひどく、遺構の範囲が不明確であった。しかし、北壁断面のⅡ層下部にレンズ状の焼土が確認されたので、発掘範囲をⅠ-7グリッドへ2×2.5m拡張した。その結果、Ⅰ-7グリッドで、東西に並んだ焼土が検出され、大小不揃いの礫が焼土を囲む形で散見された。東側の焼土は長径約60cm、短径40cm、厚さ約10cmであり、西側の焼土は長径約1.2m、短径約80cm、厚さ約20cmの範囲である。石は人頭大から拳大のものが多く、焼けて赤発したものもあった。焼土の全体の形状は、南半分が攪乱のため確認できないままであるが、本来の形は二つの楕円形が一部重なる様相を呈していたものと思われる。

出土遺物は土器片多数と石器3点である。土器片は、Ⅰ～Ⅵ類土器の全てが見られたが、Ⅱ層からの出土が殆どである。無文の土器片にはⅡ類土器が多く、有文の土



第 8 図 3 号遺構実測図

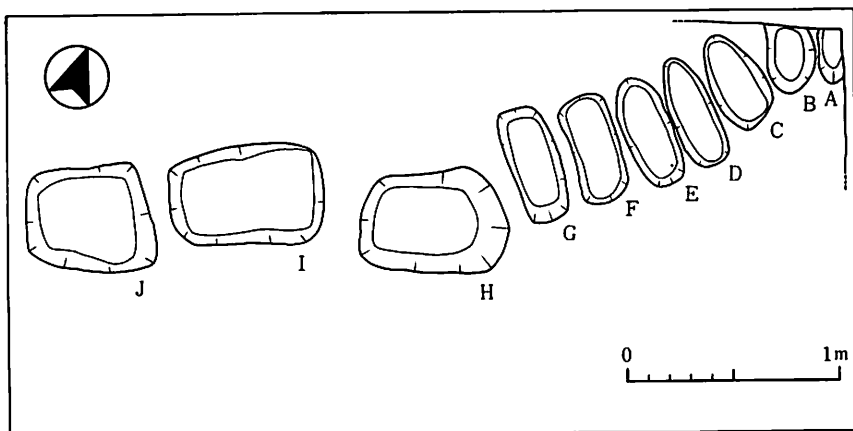
器片にはⅣ類土器が多い。焼土下部からは、Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅴ類の土器片（第14図98～118）がほぼ均等に出土する。石器は磨製石鏃（第20図23）とその未成品、及び磨製石斧（同図24）である。石鏃は攪乱を受けているⅠ－6グリッドのⅡ層よりの出土である。石斧は石組の外側より出土した。（三山）

集石遺構（第9・10図）

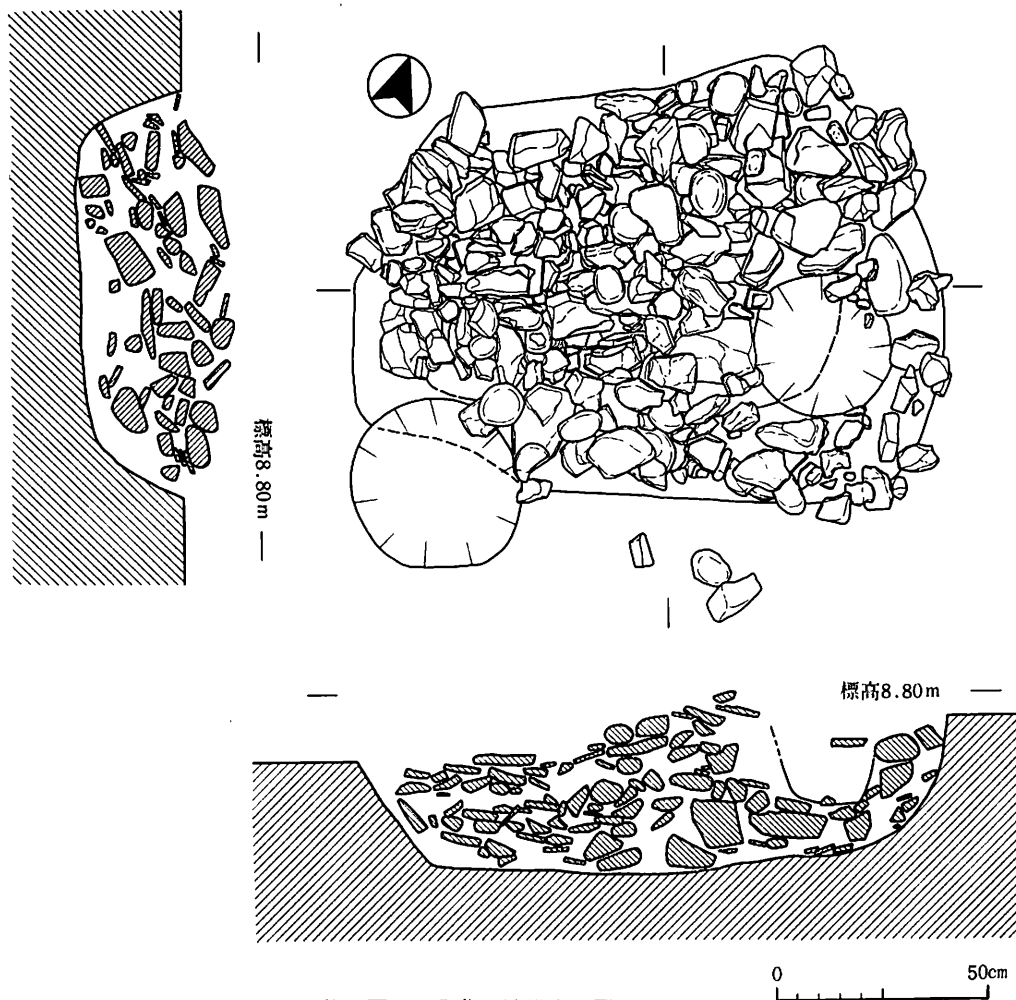
D－3、E－3グリッドから九基の集石遺構と一基の土塋が検出された。遺構は北東から南西方向へゆるやかに弧状に並んでいる。東からA～J号遺構と呼称することにした。

10基は共に第Ⅱ層黒褐色砂層から第Ⅲ層黄褐色砂層に掘り込まれている。Ⅰ号遺構は土塋で、数個の礫が出土したのみであった。A～G号遺構は楕円形で深さ約20cmであるのに対し、H～J号遺構は隅丸方形を呈し約40～50cmの深さを持つ。九基の集石遺構はいずれも掘り込みの底部から礫が充填されている。礫の大きさは長径2cmから19cmまで様々であるが、H・J号遺構ではA～G号遺構に比べて大きめの礫が目立っていた。なお、集石に使用された大量の礫は硬質砂岩様の転石か、小片に剝離した粘板岩様の石材のいずれかであった。また、A～G号遺構において両側に隣接する集石遺構との境界を示すかのように、長方形の扁平礫が横倒しにきちんと並んでいた箇所があった点が注目された。

D－3、E－3グリッドの遺物は、ほぼ遺構内に限られて出土した。Ⅰ～Ⅲ類の土器片、青灰色の硬陶、染付片及び石斧、磨石、敲石、砥石等の石器が出土したが、1～3号遺構と比較して土器の出土は極端に少なく、かわりに石器が多く、しかも土器、石器ともにH・J号遺構に集中していた。またH号遺構（第10図）からピットが二基検出された。いずれも平面形は円形で直経約60cmと80cmであった。うち一基は土塋の一部を切って掘り込まれ、もう一基は集石の中に約22cm掘り込まれており、ともに若いヤギの骨が1体ずつ埋葬されていた。なお、H号遺構上部の礫と混在して貝2個、黒曜石片1、鉄釘片1が発見された。（神宮）



第9図 D-3、E-3グリッド遺構実測図



第10図 H号集石遺構実測図

三、出土遺物

1. 土 器 (第11・12・13・14・15図)

土器は各層から出土しているが、Ⅱ層からのものが多い。出土土器は、文様及び形態により、Ⅰ～Ⅵ類に分類した。

Ⅰ類 (10・12・59～63・74・78・110・115・127～130)

口縁部の内傾したものが多く、口唇部は外反気味に反りながら肥厚し、その断面は三角形(59・62・63・74・75・110・115・127)ないし蒲鉾形(60・61・128～130)である。胎土は細かいものと粗いものの両者があるが、雲母片を含むものが多い。焼成は良好で、ヘラ削り、ナデ調整が施されている。色調は、橙色～赤褐色を呈している。74は他に比べて薄手である。63は文様の一部と思われる部分が残し、口縁部は著しく外反している。59・62・127の口縁部の断面は発達した三角形を呈している。130は他に比べて口縁部が薄い。なお、D-3、E-3の遺構内から検出されたものを除けば、Ⅱ層からの出土例が顕著である。

Ⅱ類

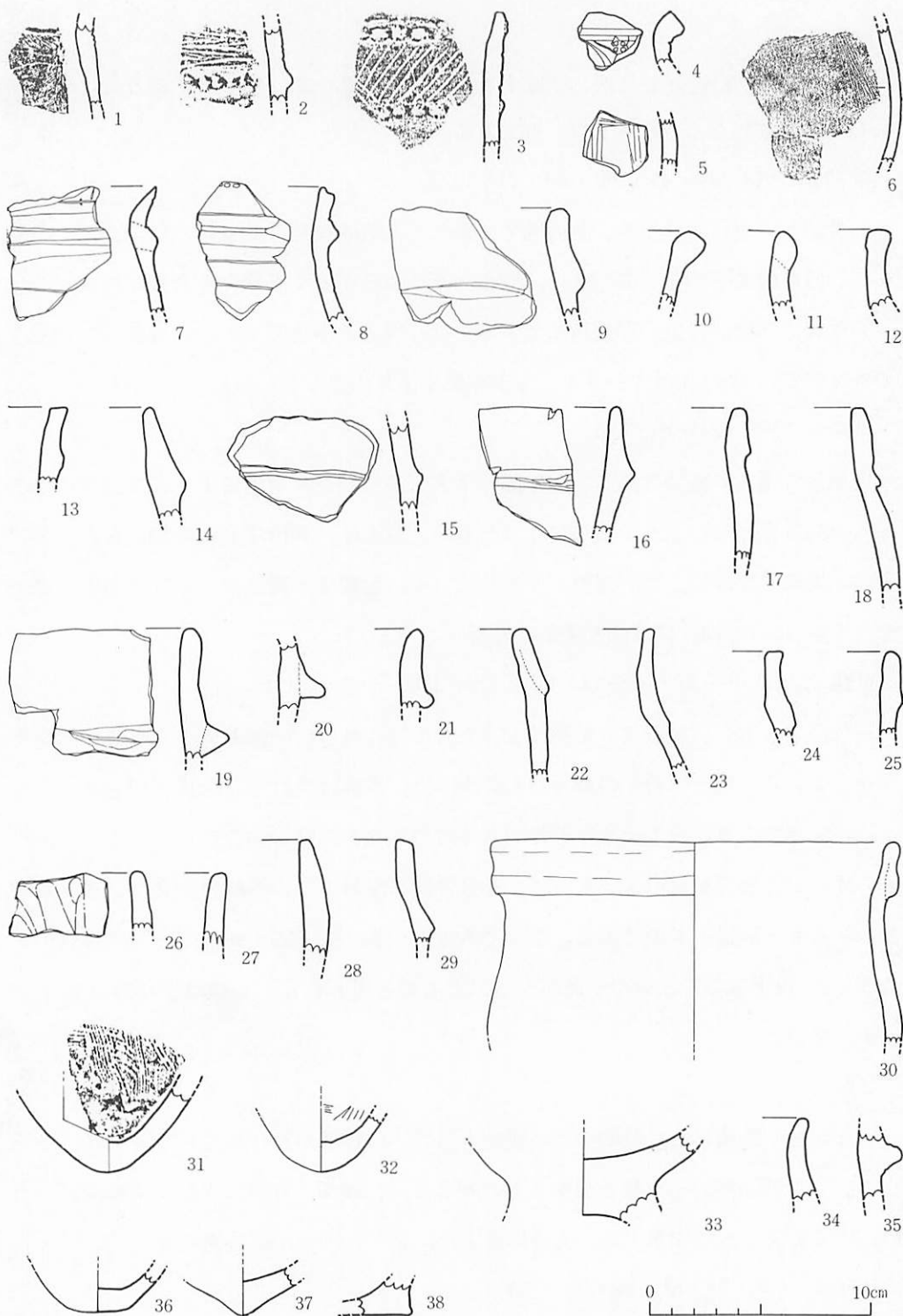
凸帯を有するもののうち、口縁部に幅の広い凸帯をつけたものである。

Ⅱ類 a (13・16・23・24・42・44～48・103・105・108・133)

口縁の凸帯部が縁端に近づくにつれて厚さを減じ、その断面が縦長の三角形を呈するものである。縁端即ち口縁部が丸味を帯びたものと平坦に均されたもの(13・24)がある。胎土に雲母片、白砂粒を含むものも多く、焼成は良好である。ナデ調整を主流とし、指頭圧痕、条痕、ヘラ削りがみられる。色調は、外器面が赤褐色～黒褐色、内器面が橙色～赤褐色を呈している。Ⅱ層上部からの出土が多い。

Ⅱ類 b (9・17・22・25・30・50～54・85・86)

Ⅱ類のうち、口縁部の凸帯が縁端に至っても厚さを減じないものである。1・2号遺構に見られ、主として、その覆土中から出土した。胎土は密で細かい白砂粒、雲母片を含み、焼成は傾向として脆弱である。色調は橙色～赤褐色を呈するものが多い。54は口縁部が外反し、一部にススが付着している。85・86は外器面に沈線が施されている。



第II図 I号遺構出土土器実測図 表採；7・37・38 II層；2・5・9・15・17~19
 ・21・26・27・29・31 II層下部（遺構内覆土）；1・3・4・6・8・10~14・16・20
 ・28・32・36 遺構床面及び焼土内；22~25・30・33~35

Ⅲ類

Ⅱ類と同じく口縁部が帯状に肥厚するがあまり目立たず、肥厚が下の方だけにしわ寄せされたような感じの一群である。

Ⅲ類 a (18・40・41・55・104・118・132)

凸帯部が下方にずり下り、断面図では垂れ下り気味に見えるもの。口縁部はやや外反し、口唇部は平坦なものが多い。胎土は密なものが多く雲母片を含む。焼成はあまく、色調は赤色、橙色、赤褐色を呈する。41は薄手で赤色を呈し、口縁部はやや扁平で外反している。118はⅠ－7グリッドの焼土より出土している。

Ⅲ類 b (20・21・35・106)

Ⅲ類 a の傾向が極端に達し、凸帯部の下方へのしわ寄せが更にすすんで口縁下端に太めの凸帯を配したような感じになったもの。胎土は、雲母片や白砂粒を含むものが多い。焼成は脆弱で、ナデ調整が施されている。色調は赤褐色もしくは橙色が基調となっている。106は、口縁部が著しく外反している。

Ⅳ類 (2・3・82・95～97・117・119・120)

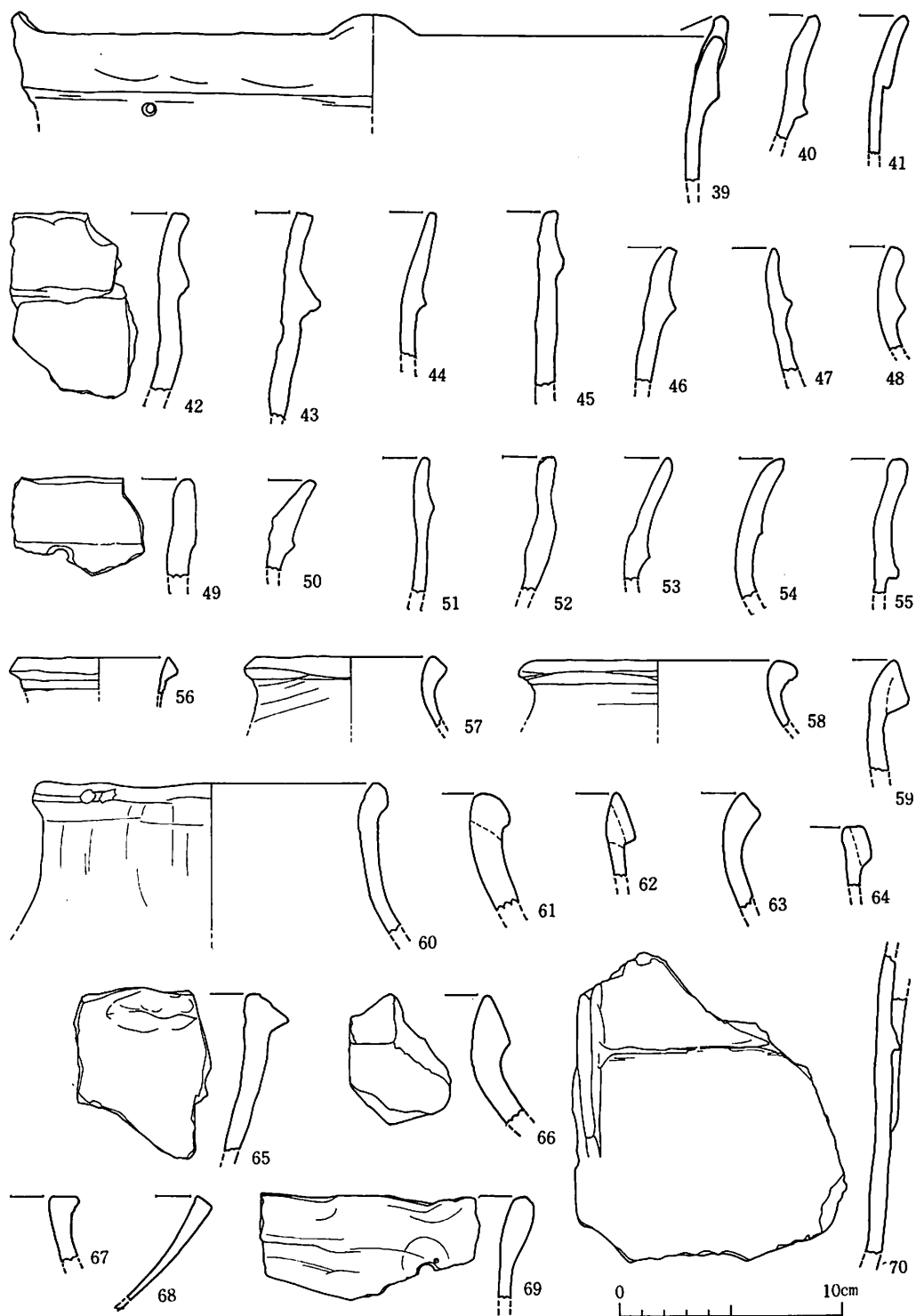
刻目凸帯を有し、綾杉文、斜格子文、もしくはこれらの一部と考えられる沈線文が施されている。胎土は粒子の細かいものも多く、焼成は良好で、色調は橙色系、もしくは赤褐色である。最も大きな破片である97でみると、横方向の刻目凸帯が二条あり、その間に縦方向の刻目凸帯があって、凸帯の間に反対方向の斜線群が交互に施されている。3も97と同様のものである。細片であるが、2・82・95・96も同じ文様構成であろう。117以下はこの類のやや簡略化されたものと思われる。本類は主に攪乱層より出土している。

V類

胴部が強く膨隆した比較的小型の壺形土器で、口唇部が外にめくれながら急に肥厚して、その断面形が三角形を呈するものも多く、口縁部から肩にかけて文様を持つ。いわゆる喜念Ⅰ式に相当する。文様構成より、a・b・cに細分を試みた。

V類 a (4・75・81・98・99・100)

文様の基本構成が細い粘土紐を縦と横に貼り付け、その両側又はその上に文様を施すもので、刺突連点文を施すもの(4・75・81・98・100)、綾杉状の沈線文を施すも



第12図 2号遺構出土土器実測図(1)

I 層; 40・42・46・50・53・62・64・66・67

II 層; 39・41・52・55・56・57・61・63・69

遺構床面; 47・70

遺構内焼土; 45・49

遺構内覆土; 43・44・48・51・54・58・59・60・65・68

の(99)の2種類がある。また凸帯の間を沈線文で充填したものも認められる(4・98)。胎土は砂質のものと泥質のものに分かれるが、一般に雲母片を含み、焼成はややあまい。作りは比較的丁寧で、ナデとヘラ調整が認められる。

V 類 b (1・5・6・73・102)

細い粘土紐の凸帯とその両側の刺突連点文が沈線文に置き換えられたものである。1・73は、凸帯と刺突連点文の代わりに有軸羽状文が施されている。102は沈線をそれに直交する短沈線で刻んだ文様を持っているが、有軸羽状文が更に変移したものと解することができる。3点ともに作りは丁寧で、ヘラ状工具による磨研が目立ち、V類aと同じく外器面の滑沢が著しい。胎土は泥質で、雲母片を多く含み、焼成はやや良好である。

V 類 c (56・57・58・79)

文様が頸部にのみ認められ、沈線が横方向かもしくは羽状文状に斜めに入れ違いながら施文される。胎土は砂質で焼成はV類bに較べてあまく、橙色を呈している。

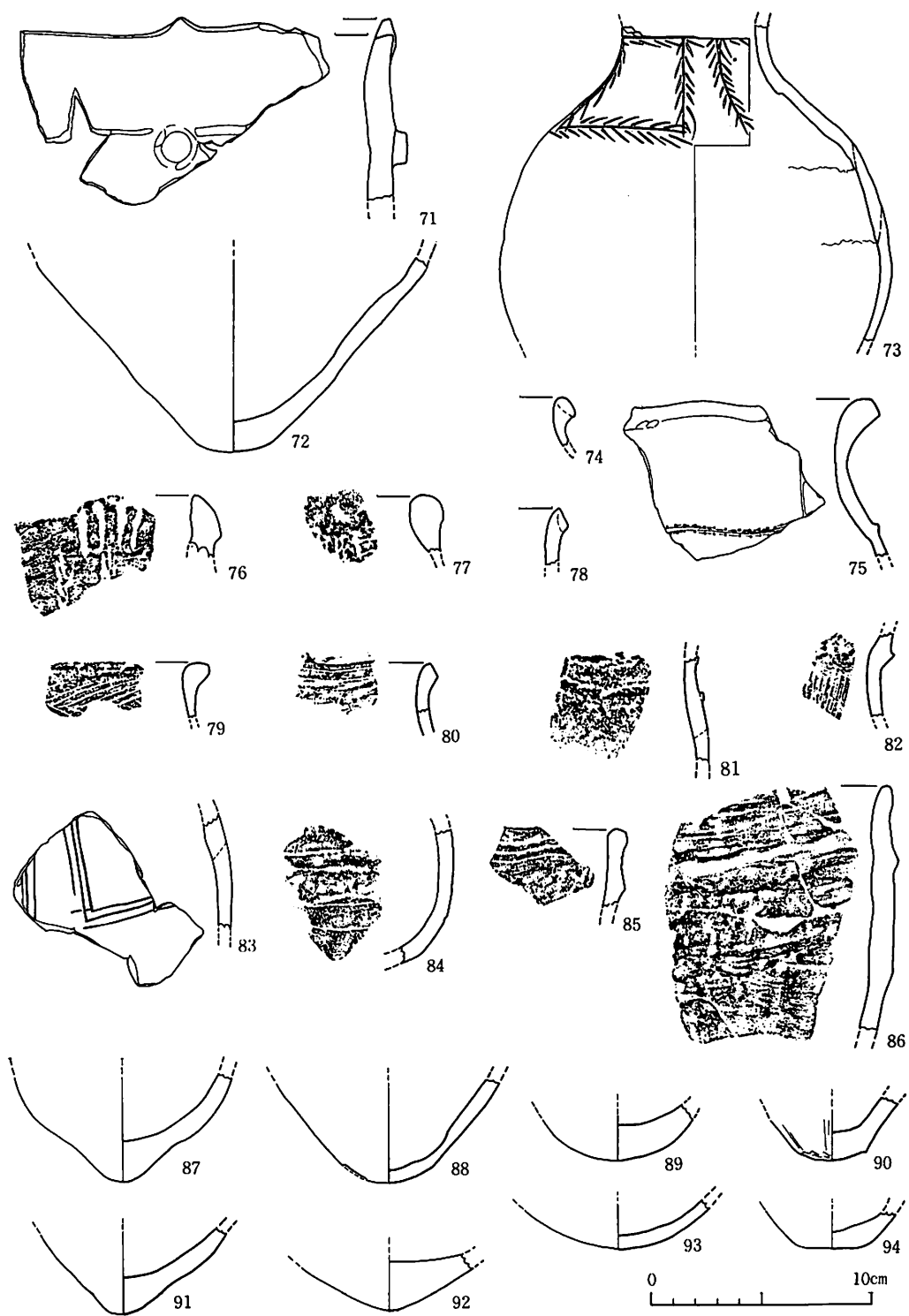
VI 類

前記I～V類以外の特徴を持つもの、ないしその特徴の把握し難いものをVI類として一括した。

a 19・65・109・113・135は外耳状の貼り付け凸起を持っている。普通口縁下端ないし胴部上端あたりに付けられるが、65は長さが短くてしかも口縁上端に付けられている。113はいわゆるリボンであって、貼り付けの具合が著しく堅牢さを欠いている。胎土は粗いものと密なものがあるが、焼成は良好で橙色のものが多い。

b 39・49・69は口縁部の断面形がII類bに近い。しかし、実測部位にもよるが、肥厚部下端の段差がやや弱く、この部分の指頭による横ナデの痕が顕著である。39は口縁に山形の凸起を持つ。凸起の数は4個であろう。宇宿上層式と一括されるものの中に時々見かける型である。三者共に凸帯下端に接して焼成前の穿孔がある。用途を一つにしたものであろうか。

c 71は口縁端が平たく均され、山形の微小凸起があり、肥厚部下端に径13mm、高さ6mmの円柱状の飾りがある。107も口縁部に肥厚帯があって、口唇部に山形とそれに接する別の凸起が見える。また70は肥厚帯からその下方5cmにかけて方柱状の粘土柱



第13图 2号遺構出土土器実測図(2)

表採:80・82, I層:81・83・89・93, II層:76・77・84, 遺構内覆土:85・86・87・88・90・91・92・94
遺構床面:79, 遺構外焼土:71・72・73・74・75・78

を貼りつけてあり、内壁には一度縦方向に擦った後で更に水平方向に擦り重ねた成形痕が著しい。形ではⅡ類bに近い印象を受ける。しかし、胎土は良質で砂粒が少なく成形に雄揮さがあり、何よりも焼き締りの良さで一般のⅡ類bとは著しい隔たりがある。類例の増加を待ちたい。

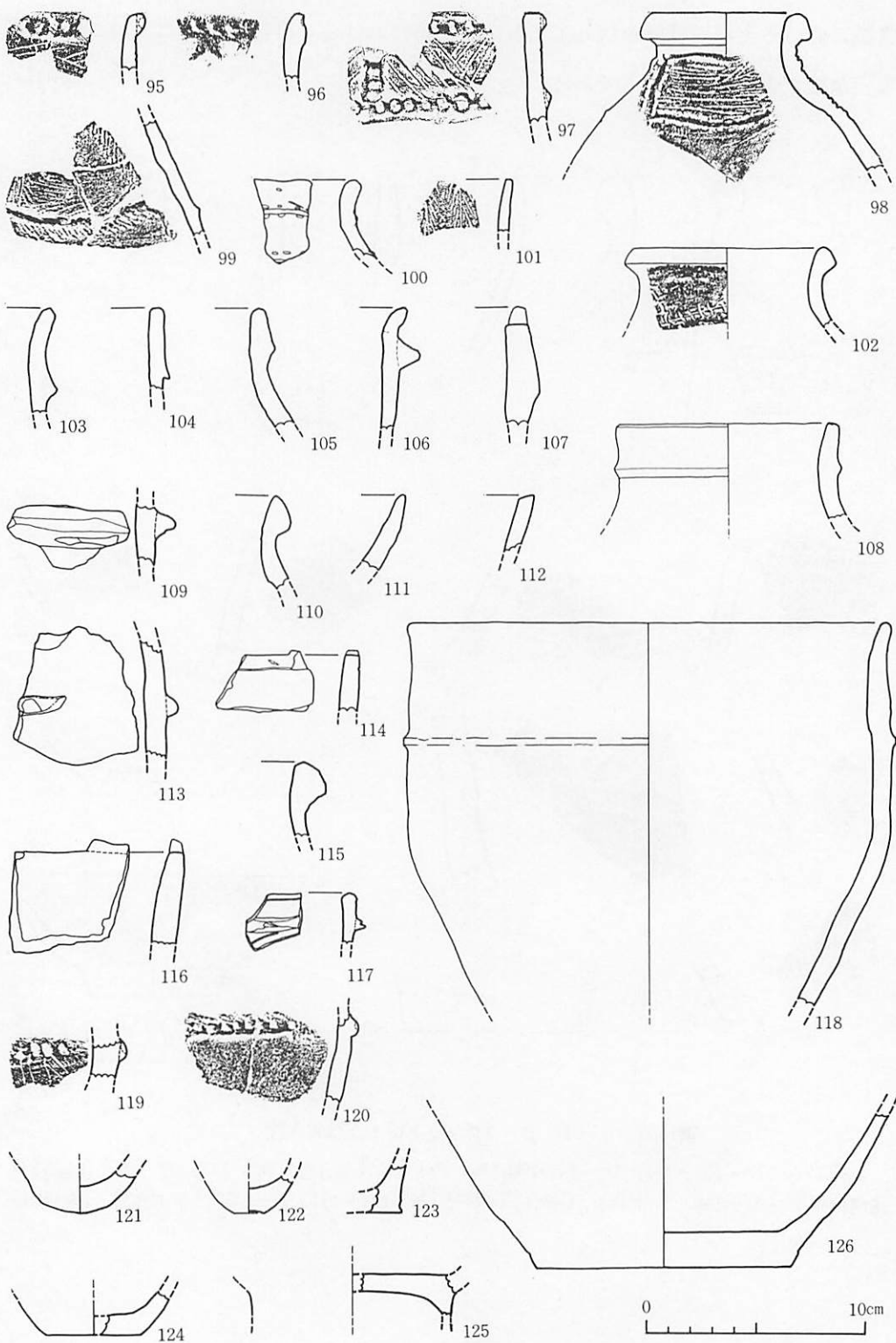
d 114・116は、真直で上端の平らな口縁部を持つが、小さなランパート状の凸起があり、一種の有段口縁を成している。胎土は密で焼成も良く、成形にもやや入念な風がある。色は褐色である。7・8は凸帯の上と下に平行沈線文を横方向に施す。胎土は細かいが焼き締っておらず、橙色を呈し、ナデ調整が施されている。26～28は口縁が丸味を帯びている。67・68・134などは口唇部が平たい。胎土は細かく、焼成も良好であるが、前者は赤褐色でナデとヘラ削りが見られ、後者は橙色でナデの痕がある。66は山形の小凸起があって、その部分が更に肥厚するものようであるが、小破片のため不明である。68は器形として珍らしい浅鉢形であるらしく、その異常な薄さが目を引く。その他、111・112等、特に論じなかったものを含めて、この段に述べたものは既述の類に当てはまらないというより、小片すぎてその帰属の不明なものがむしろ多い。

底部 (31～33・36～38・72・87～94・121～126・136・137)

乳房状尖底(37・87・91)は、胎土は細かく白雲母片を含む。焼成は良好で橙色を呈し、ナデ調整がみられる。平底(38・90・94・123・124・126・137)、丸底(31・32・36・72・89・92・93・121・122・136)は、胎土は密であり雲母片を含む。焼成は良好で色調は赤褐色、黄褐色及び橙色を呈する。調整はナデやヘラによるものが多く、指頭圧痕、条痕もみられる。36は、平底気味の丸底、92は尖底気味の丸底、122は上げ底気味の丸底である。また、脚台付底部にも平底型(125)と丸底型(33)がある。

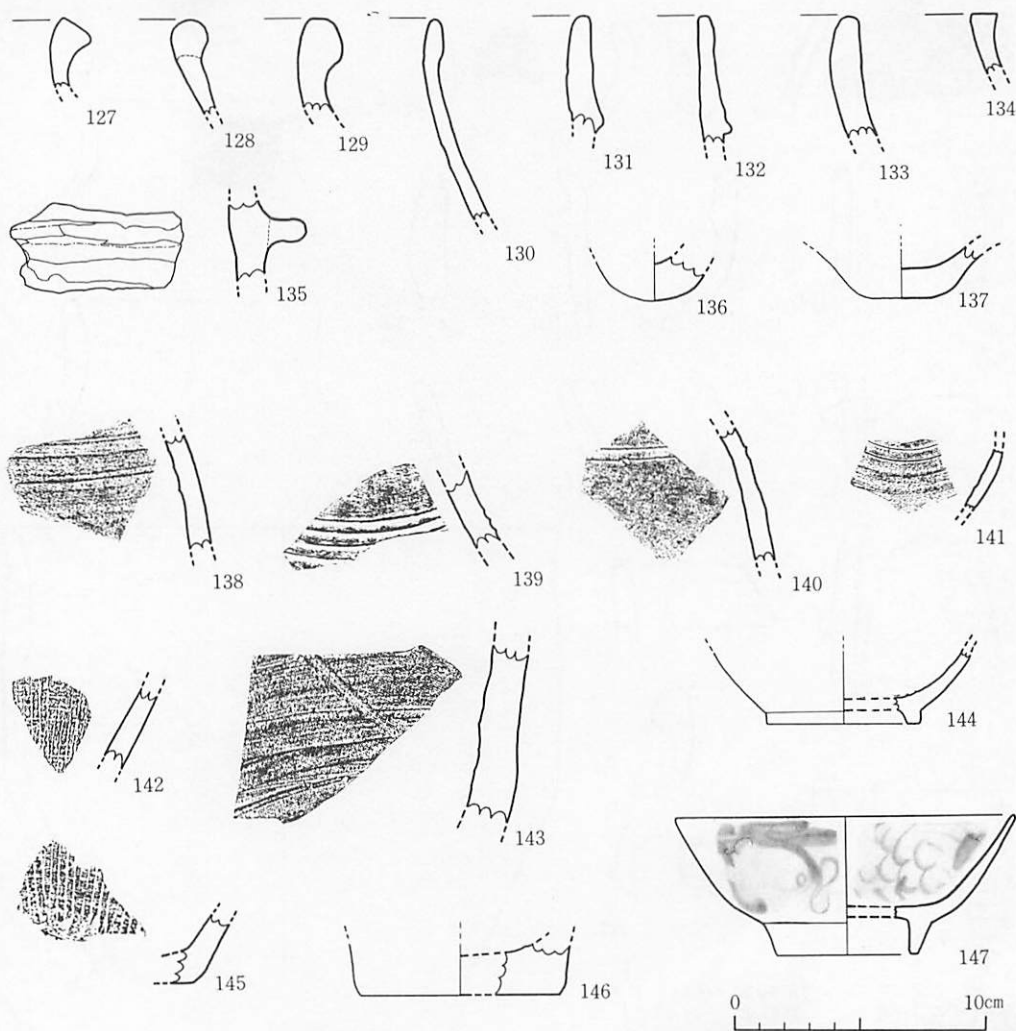
その他、時代を下るものとして、陶器(138～143・145・146)と染付磁器の底部(144・147)などが出土している。これらはD-3、E-3グリッド遺構及び攪乱層より出土した。

I類及びVI類bは宇宿上層式と一括されている土器群に属し、IV類はいわゆる面縄西洞式に該当する。V類は喜念I式に比定したが、文様の施文方法によって三種に細分した。Ⅱ・Ⅲ類は始め、沖縄で析出されたカヤウチバンタ系の土器に似ている。本



第14図 3号遺構出土土器実測図 I層;124, II層;95・106・108・114・121・122・
123・125・126, 焼土下部;115~120

遺跡における土器の様態を以てすれば、奄美におけるこの種の土器について更に詮索の余地があるものようである。(西谷、林田)



第15図 D-3、E-3グリッド出土土器実測図

表採;127・128・132・141, D-3 : I層;136, E-3 : I層;130・142・145, D-3 : II層;144
 遺構内覆土 A号;140, B号;138, G号;135, H号;129・131・137・139・147, I号;133・134・143

2. 石 器 （第16・17・18・19・20図）

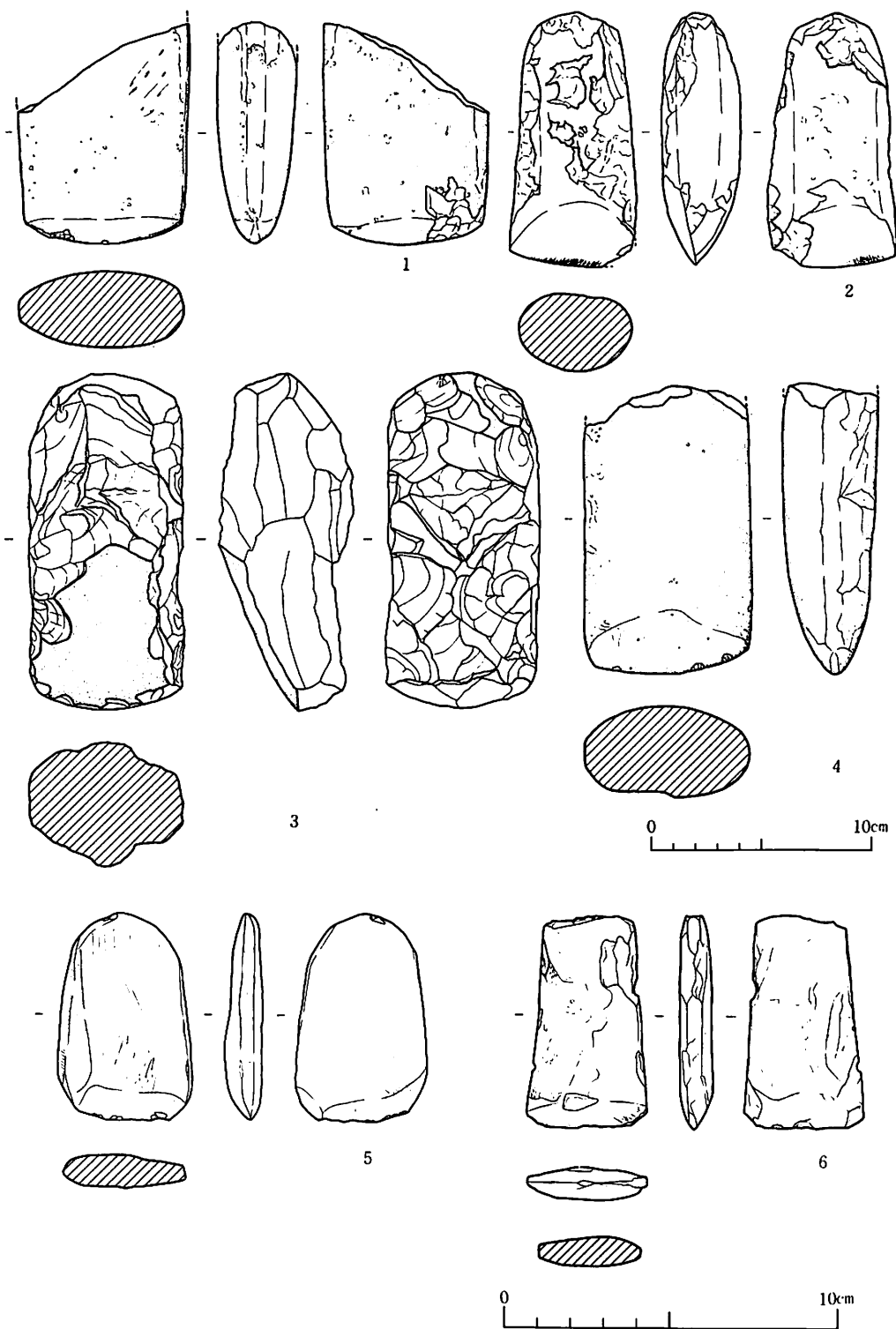
今回出土した石器は、磨製石斧13、磨石9、敲石5、砥石1、磨製石鏃1、及び磨製石鏃の未製品と思われるもの1点で、D-3、E-3グリッドからその半数近くが出土した。

磨製石斧 （1・2・4～6・12～17・24）

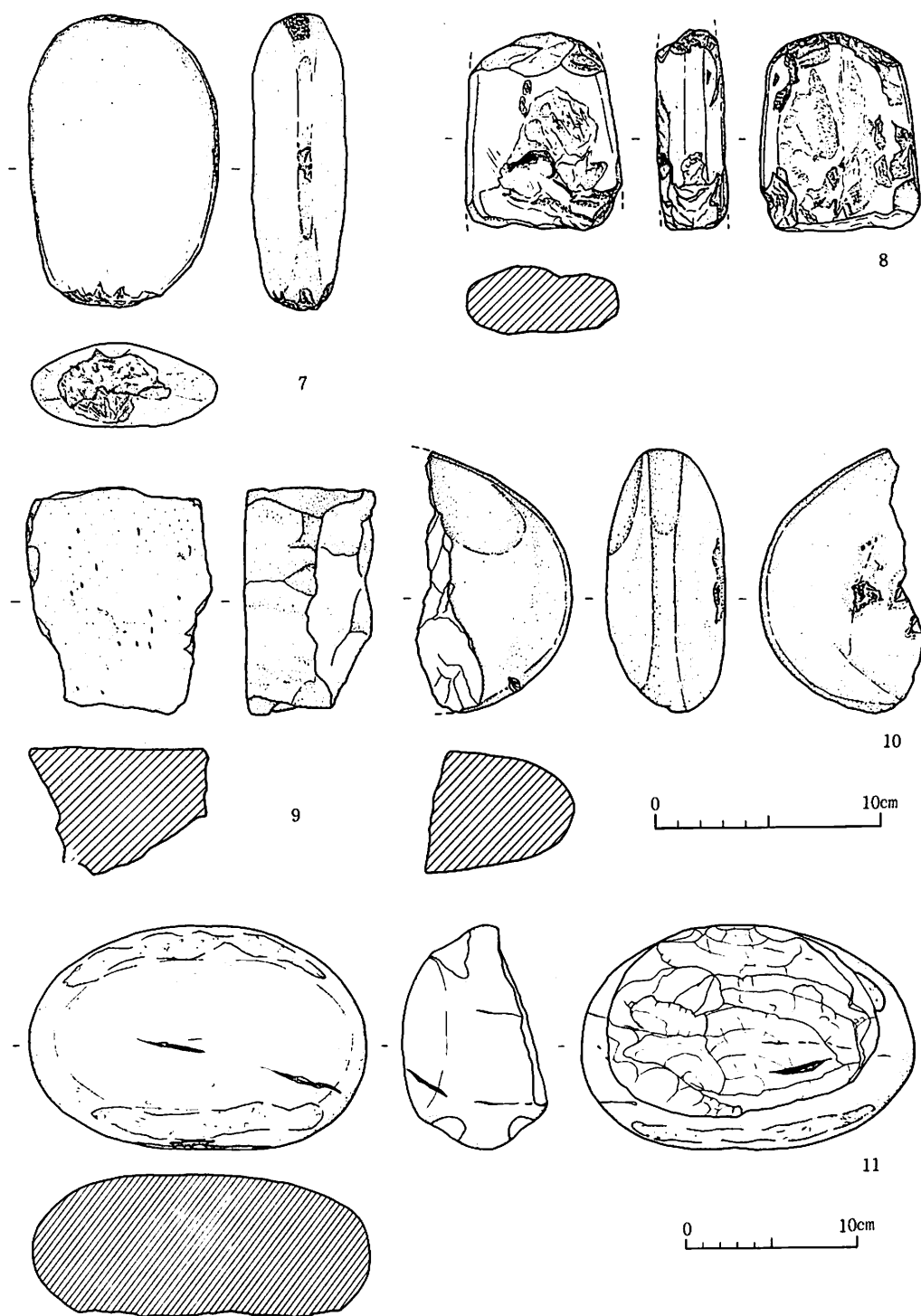
1・4・16は、いずれも大形で両刃の石斧の刃部の残欠である。1は輝緑岩製で、研磨面が一部に残り、図の裏面右下に使用による剝離痕がある。4は、全体的に粗い研磨がなされ、刃部は磨耗が著しい。輝緑岩製である。両者共に正面形は長方形、横断面は楕円形を呈する。16は同じく輝緑岩製で、一部に研磨面が認められるが、全体に敲打による調整痕が優越している。正面上部に自然面を残す。旧の形は、ほぼ長方形であったと思われるが、両側辺がやや内湾している。横断面は楕円形を呈する。

24は輝緑凝灰岩製で、主面は横方向に滑らかに研磨されているが側面はやや粗い。側部に一ヶ所、紐かけのノッチがある。偏刃であるが刃端は磨耗して厚くなっている。旧形短冊形であった石斧の刃部の欠損後、何かを研磨するための用具に転用した可能性が強い。15は前同様、輝緑凝灰岩製で刃部の残欠であるが、刃縁まで欠失している。研磨されているが、啄彫面が随所に残存している。2は大形ではないが厚みのある堅牢な両刃の石斧である。輝緑岩製。刃部は滑らかに研磨されているが基部は啄彫痕が優越している。特に基端は啄彫のままである。14は粘板岩製。基部の残欠であるが基端まで欠失している。研磨は丁寧であるにもかかわらず、啄彫痕が広範囲に残存している。13は片刃の石斧の刃部の残欠である。頁岩製である。全面を滑らかに研磨している。横断面は扁平で薄手である。17は輝緑凝灰岩製で、刃部の残欠である。刃縁の残存状態から両刃と思われる。横方向の研磨痕が一部に認められるが、啄彫痕が広範囲に残存している。

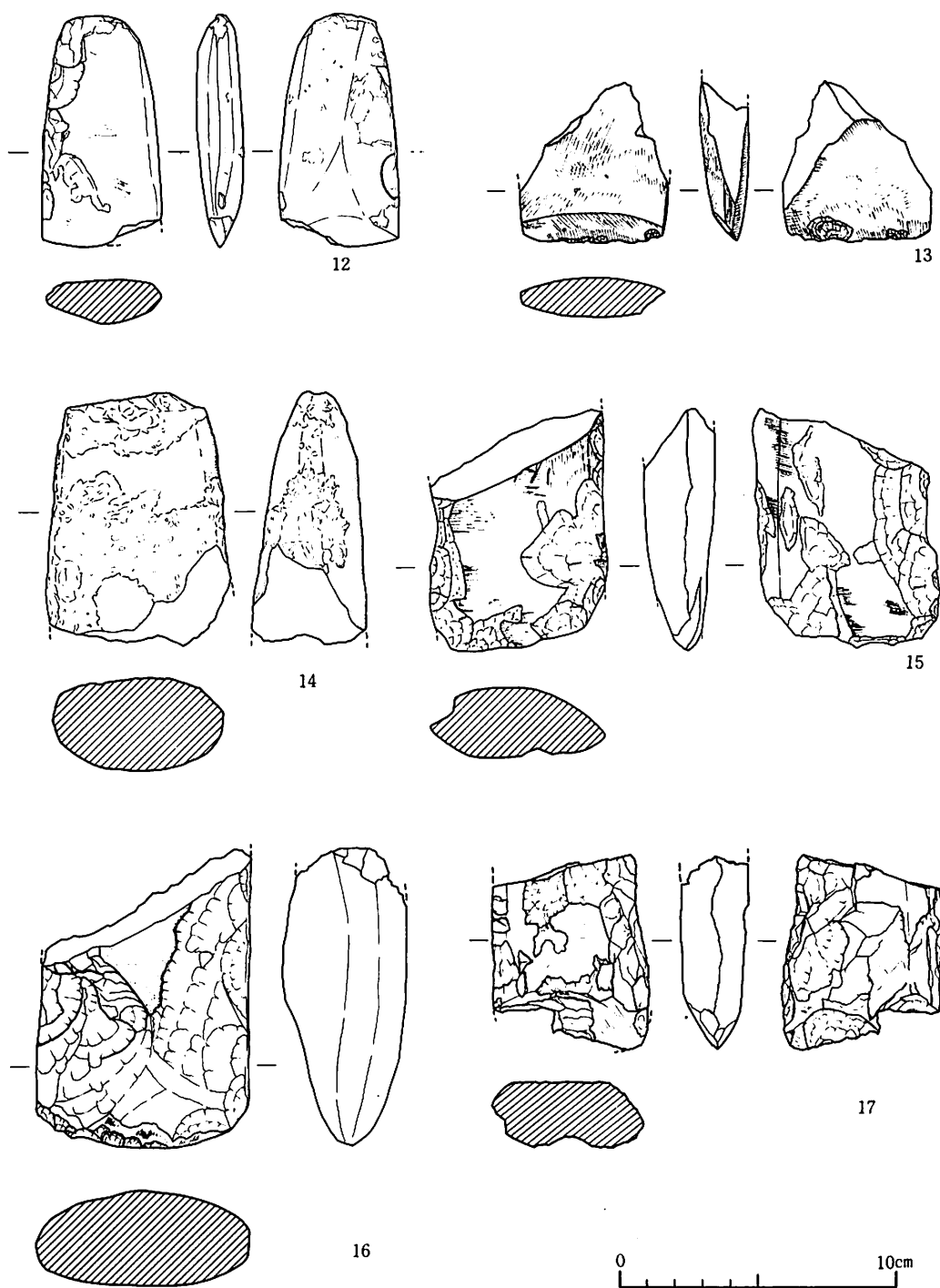
5・6・12は小型の石斧である。いずれも扁平で、薄手である。5は頁岩製で、自然礫を利用し、全面を丁寧に研磨してある。刃部に使用痕らしき欠損がある。6は粘板岩製で、基端をわずかに欠損している。研磨痕が全面に残存している。刃部にわずかに使用痕が認められる。両側辺にそれぞれひとつずつ小さいが鋭いノッチがある。平面形は長台形を呈する。12も粘板岩製で刃部の一端を欠損している。研磨は丁寧で



第16図 D-3、E-3グリッド出土石器実測図(I)
 遺構内覆土 E号;1・6, I号;5, J号;2・4 D-3:Ⅲ層;3

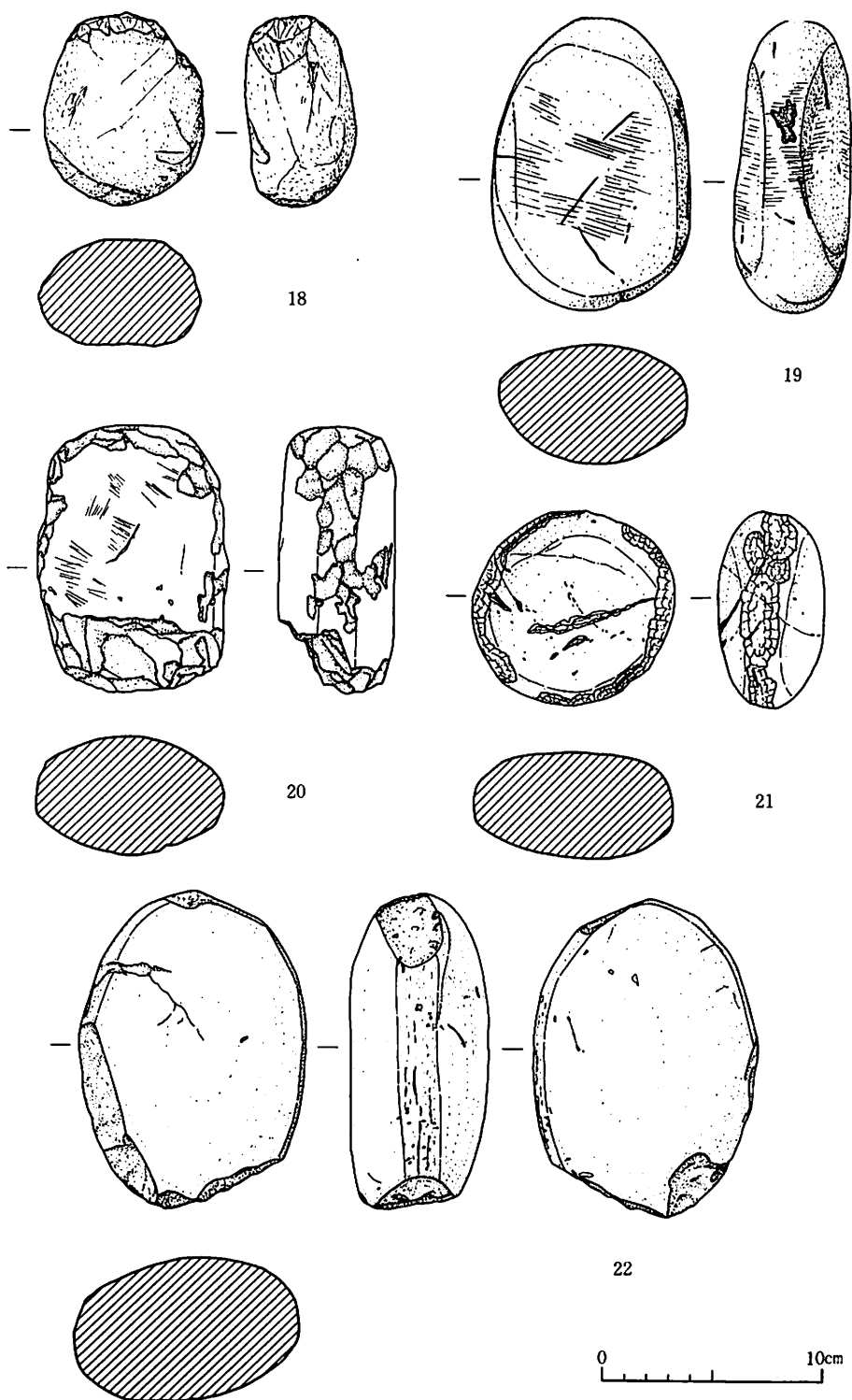


第17図 D-3、E-3グリッド出土石器実測図(2)
遺構内覆土 H号;8・9・10, J号;7・11

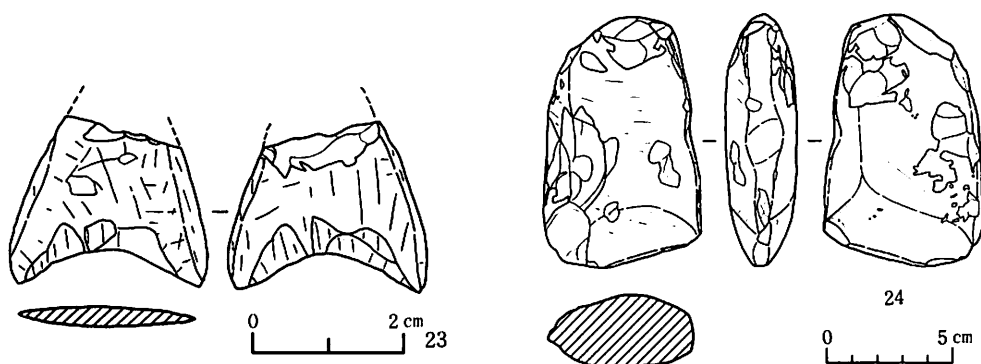


第18図 1号遺構、2号遺構出土石器実測図(1)

1号遺構内覆土;14, 2号遺構内覆土;12・13・15・16・17



第19图 1号遺構、2号遺構出土石器実測図(2) 1号遺構内覆土;18 2号遺構表採;21
2号遺構I層;20 2号遺構II層;22 2号遺構覆土;19



第20図 3号遺構出土石器実測図 II層; 23 石組外; 24

研磨痕が斜方向に認められる。平面形は長台形を呈する。5・6・12は、いずれも片刃に近い両刃である。

磨製石鏃 (23)

凹基式の鏃である。石質は粘板岩である。先端を欠失しており、基部に浅い抉りを入れてある。全面にわたって研磨してあり、研磨痕は粗い。弥生時代中・後期に、九州本土において盛行するものに類似している。(吉永)

磨石 (7・10・11・19・22)

7・10・11・19・22はいずれも砂岩製である。7は側面に擦痕を有し、上端と下端には敲打痕が認められる。断面は楕円形を呈する。10は約二分の一以上が欠失している。全面に擦痕が認められ、特に側面上部において顕著である。11はほぼ全面にわたって丁寧に研磨されており滑らかである。上部と下部に使用痕が認められ、図の裏面はほとんど欠失している。形状はいわゆるクガニイシに類似している。19・22はともに扁平な卵形状を呈する。19は表裏両面に横方向の強い擦痕が認められる。裏面の左側辺には他の面と稜をなして接するほどの特に顕著な磨耗面を有する。22は全面が研磨されており、特に右側面は著しく使用されている。上端に敲打痕がみられる。

敲石 (3・8・18・20・21)

18は輝緑凝灰岩製の円礫を用い、下端に敲打痕を有する。表裏両面に擦痕も認められる。21は砂岩製の円礫を利用してあり、側辺の全周にわたり顕著な敲打痕がみられる。8・20はいずれも破損した石器の再利用品である。8は頁岩製の石斧の基部である。断面は隅丸長方形を呈し、下端は敲打により磨耗している。20は輝緑岩製の大形石斧の基部であろう。断面は楕円形を呈し、表裏両面には横方向の研磨痕を有する。

基端に顕著な敲打痕がみられる。3は砂岩製で、表面の下半部と裏面の上部に自然面を残し、下端に敲打痕を有する。石斧の未製品の可能性もある。

砥石 (6)

9は砂岩製で、片面は丁寧に研磨されており、左下方が僅かにくぼんでいる。この一面のみ使用されたと思われる。なお、ここでは砥石としたが、明確には断定できない。

(平)

四、ま と め

サモト遺跡に関する今回の調査では、弧状に並んだ小判形の石組の列と炉址を持つ方形の石組遺構三基が検出された。前者は近世の陶磁片を伴うものであるが、その様態は他に類例が無く、性格不明のままである。むしろ民俗に考察の手がかりのあることが予想され、次回調査の際、聞き込みに若干の時間を割きたいものである。

後者は宇宿貝塚^{註1}（奄美大島）、住吉貝塚^{註2}（沖永良部島）、面縄貝塚^{註3}（徳之島）などに類例があり、いずれも住居址に比定されている。その時期はいわゆる面縄東洞式（面縄第4貝塚例）～宇宿上層式（宇宿貝塚・住吉貝塚例）で、サモト遺跡の時代とも齟齬しない。

サモトの例は明瞭な炉址を伴うものであり、土器等の散乱の様子から判断しても住居に関連するものであることは疑いない。ただ、他の遺跡の例と共にいずれも過小であり、砂丘であって柱穴等の発見が皆無であるため、住居の「何」に当るのか、厳密には不明のままである。砂の中に施設を探すのは至難であるが次の調査に僅かな期待を繋いでおきたい。むしろ、住居の「群れ方」の方が握み易いと思うが、もしそれができれば、当時の社会組織究明の緒となるかもしれない。

遺物では土器が多く、Ⅰ～Ⅵ類に分類してみた。それらは、Ⅰ類（宇宿上層式）、Ⅳ類（いわゆる面縄西洞式）、Ⅴ類（喜念Ⅰ式）等の、はじめ奄美で析出されたグループと、Ⅱ・Ⅲ類のはじめ沖縄で析出されたカヤウチバンタに類するものとに大別される。これらの土器片は、Ⅳ類以外は石組内の覆土より混在して出土しており、しかもひどく攪乱されていないことから、おおよそ同時期のものと概括して大過ないであろう。

しかし、出土位置の上下によって漸移的な推移が僅かながら観察される。即ち、住居址床面直上及び焼土部分ではⅡ類b、Ⅲ類aが多く、しかもその焼成はあまいが、Ⅱ層上部（覆土上部）に推移するに従ってⅡ類aが増し、焼成も良好になる；Ⅰ・Ⅴ類は、床面直上、焼土部分からも出土するが、Ⅱ層上部からの出土は少数になる；口縁に凸帯を有する土器片は、下層から上層に向かうに従い、凸帯部が明瞭となり焼成もよくなる傾向が窺える、などである。なお土器を通観して、当遺跡にのみ認められる特殊な点が散見されるが、これは住用湾内に占地して他と隔絶しがちであった当遺跡の性格に拠ることかも知れない。逆説めくが他の奄美の先史遺跡に比して、カヤウチバンタ式の類似形が多いことは、交通に陸路を採ることの少なかったサモトの人々の海の往来を物語るとするのは強弁であろうか。

住用湾はその奥も、左右の岸も甚だ峻嶮な地勢である。サモト遺跡は湾の一番奥の僅かに開析された小さな内海に拠ったものである。湾内には類似の地形が幾つかある。湾外と隔絶する反面、それらの類似地点ごとに数戸ずつ纏まった小集落があって、有無を通じ合いながらひとつの集団をなし、北の宇宿、西の名瀬方面と拮抗の形を成していた可能性は小さくない。次回調査の際に遺跡の分布調査が必要な所以であろう。

（西谷）

註1 河口貞徳他「宇宿貝塚」 笠利町教育委員会 1981

註2 国分直一他「奄美大島の先史時代」 『奄美—自然と文化』九学会連合奄美大島共同調査編 1959

註3 註2に同じ